

■ 編集委員

齋藤 一之 (委員長)

穂田 真澄 板橋 明 糸山 進次 小山 勇 清水 道生 鈴木 洋通
竹内 勤 土田 哲也 西村 重敬 松下 祥 丸山 敬 持田 智
渡辺 修一 (五十音順)

■ 編集後記

埼玉医科大学雑誌の編集委員会は最近概ね金曜日の昼休みに開催されています。私は月および金曜日が外来日で、毎回70-100名の患者さんに予約をいただいているため、就任後1回も会議に出席したことがありません。完璧な幽霊委員ですが、この度、恥ずかしながら後記を担当する順番になりました。そこで、編集委員というよりは、一読者の臨床医として、雑誌の展望を述べたいかと存じます。

臨床医学の研究は今や転換期を迎えています。あらゆる研究はその到達点を明確にすることが求められており、「診療ガイドラインの作成」と「Tailor(Order)-Made医療の確立」に繋がる内容のものが重視される風潮にあります。このため、一定の評価を得るためには、「標準化」と「個別化」といった両極端にあるゴールの何れかを目指すのが近道です。また、その際のアプローチとしては、前者では大規模臨床介入試験が、後者では網羅的遺伝子解析が、最もエビデンス・レベルの高い研究手法です。これらの動向のあおりを受けて、医学系大学院はそのシステムの改変を余儀なくされております。昨年、中央教育審議会は、医学系大学院は「研究者育成コース」と「高度臨床医育成コース」の何れかに分類されるべきとの答申を出しました。「良医の育成」を目指した私立医科大学の臨床系大学院は、当然のことながら後者のコースを充実させるべきと考えられます。しかし、そのカリキュラム案を見ると、「臨床疫学」、「臨床試験のあり方」などが中心を占めており、臨床医学系の大学院生は「大規模な臨床試験の一翼を担う要員」として位置づけられる可能性さえあるのです。

従来、臨床医学の研究は、基礎医学の研究成果を病態に応用し、臓器毎の差異を明確にすれば一定の業績に繋がりました。また、大学院生が従事する研究は、必ずしも将来の臨床医としての活動と内容を一致させる必要がありませんでした。研究を展開し、学術論文を作成する経験を介して、論理的思考能力を獲得できれば十分であると誰もが考えてきたからです。しかし、「高度臨床医育成コース」を履修する大学院生は専門医教育の一環として研究活動に従事し、その内容も臨床医学のニーズにより密接に関連した事項に限定せざるを得ない可能性があります。これまで埼玉医科大学雑誌は大学院生の研究発表の場を担ってきました。しかし、臨床医学に関する研究の動向が大きく変化する時期を迎えて、その在り方は再検討する必要があります。国内学会の多くの和文雑誌は、その位置づけを会員の研究発表から情報提供の場へとシフトさせています。埼玉医科大学雑誌も同様に、卒前、卒後教育における情報提供の役割が益々増大するのではないのでしょうか。

(持田 智)

埼玉医科大学雑誌

<http://www.saitama-med.ac.jp/jsms/>

第33巻 第1号 通巻120号 (季刊)

編集責任者 齋藤 一之 平成18年1月1日 発行

発行所 埼玉医科大学医学会
350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38
電話 049(276)2125(直通) FAX 049(276)2127 E-mail: igakkai@saitama-med.ac.jp
郵便振替 00540-6-19727

制作 株式会社アテネデザイン
東京都港区三田1-11-19 小宮ビル2階 電話 03(3456)5741(代) <http://www.atene.co.jp>